

# 1年道徳報告書⑥

1年主任 佐野修一郎 R3. 9. 24

今回の教材は「本の世界よ、みんなに届け 村岡花子」です。主題は「理想を求めて」です。

子どもや若い女性のために健全な家庭文学を広めたいと思った村岡花子は、苦しい中でも諦めず、英語で書かれた「赤毛のアン」を翻訳し出版しました。理想や目標を達成しようとする強い意志の大切さ、次のより高い目標に向かって努力しようという実践意欲を高めることをねらいとしています。

ちなみに、彼女の最初の翻訳本は、マーク・トウェインの「王子と乞食」です。実在のエドワード6世と町の浮浪者であるトムが瓜二つだったため、入れ代わってしまうというお話です。生徒たちにアンシリーズとともに、是非読んで欲しい一冊です。

○命がけで原稿を守った花子は、私たちにどんなことを伝えたかったのでしょうか。

- ・日本の若い女性や子どもたちに、当時の日本に欠けている豊かな文学によって作られる心を、どうしても届けたかった。この原稿によって、たくさんの人たちに、支えてくれる。または、そばにいてくれる家族の尊さを知り、この世の中を乗り越えて欲しかった。
- ・ネガティブではなくポジティブに、失ったものではなく得たものについて考える。
- ・アンはどんなときでも、想像力で明るく乗り越えていく、この物語を日本の若い人たちに届けたくて、命がけで原稿を守った。(家族や友人と一緒に、笑ったり泣いたりすることが、どれだけ幸せなのかということを知った。)
- ・苦しくて立ち止まったり、挫けたりしても、「誰でも必ず幸せが来るから、あきらめないで。」ということを知った。夢や思い出を日本の若者に伝えたい家族を大切にすることを知って欲しかった。(家族の大切さ)
- ・小さい頃から外国の物語の本をたくさん読み、大好きだったからこそ、外国の物語の良さを伝えたいという思いもあったと思うし、文章中にもあったように子どもたちに心が豊かになる家庭文学を届けたいという思いがあったと思う。



○心に残った友達や先生の言葉を書き留めましょう。

- ・花子はアンを見て元気をもらった。アンは、自分で幸せを見つけた。
- ・家族がいることで助けられ、支えられる。
- ・自分が引き込まれた本を、みんなに知ってもらいたいから。

○今日の授業で感じたことを書きましょう。

- ・日本の若者に、夢や思い出をつたえるために、花子が命がけで原稿を守ったことがすごいと思いました。
- ・アンは、困難や自分の間違い、失敗を家族や友人とともに解決しました。自分は、すぐに友人をライバルに見てしまったり、敵に見てしまったりしていました。それでは、アンみたいな「幸せ」を感じられません。アンみたいになりたいです。
- ・この授業で「赤毛のアン」を読んでみたいと思いました。花子さんはどんな時でもあきらめず、本の翻訳をしてすごいと思いました。自分も花子さんのように、1度やろうと思ったことは、やり通したいと思いました。
- ・私は、花子さんがすごいと思いました。理由は、空襲を受けているのに、原稿を持ったまま逃げているからです。私だったら、原稿よりも自分の命が危険だから、持たずに逃げると思います。
- ・自分の経験や得意とすることを活かして、日本の若い人たちに、夢や思い出を届けた花子さんのように、自分の得意なことを活かすようにしていきたいです。
- ・村岡花子さんのように、命がけで何か守れるほどのものがあるのは、すごい素敵だと思った。家族がいることで、自分も支えられているから、きちんと家族の事を大事にし、本をたくさん読んですばらしさを知っていききたい。
- ・赤毛のアンは何回も読んだことがあったので、村岡花子さんがこんなに努力して翻訳したお話と知り、感動しました。そして、赤毛のアンに残りの巻も全部読みたいです。また、王子と乞食という新しい話も知ることができて良かったです。今日、教えてもらった本は、近いうちに全て読みたいです。そして、私は村岡さんがしたことをとてもすごいと思ったので、真似できるようにがんばりたいです。



- ・私は、本を全然読まないけれど、本一つ一つには、書いた人の思いや願いがこもっているとわかった。花子さんは、アンのように周りの人を愛したり、大切にしたりした。そんな人が書いた話なら、読んでみたいと思いました。
- ・「赤毛のアン」という本を見たことはあったけれど、英語を翻訳した村岡花子さんとアンに共通点があることを初めて知りました。村岡花子さんは命がけで原稿を守ったから、すごいなと思いました。僕も「赤毛のアン」などの家庭文学を読んでみたいなと思いました。

○「道徳報告書⑤」への保護者からの感想

第5回の教材は「黒い弁当」です。

「当たり前のような事を一つ一つ感謝するというのは、本当になかなか出来ない事だけど、少しずつ分かってもらえるとうれしい！！感謝を伝えられる人になって欲しいです。」

「感謝の言葉は、その時に言わないと、後になってからは言う事ができない事が多いです。感謝はすぐに言う事が大切です。」

今回は2名の方から感想を頂きました。教員の独善的な指導にならないように、双方向の道徳授業の実現を目指していますので、是非とも、ご意見をお寄せください。頂いたご意見を今後の道徳の授業に活かし、より良い授業展開をしたいと考えております。

さて、「黒い弁当」は、私には思い入れ強い教材です。生徒にも授業中に語りましたが、私の高校一年生の出来事が思い起こされるからです。高校に入ると弁当持参になるのですが、私の弁当はご飯は海苔で真っ黒、おかずは2品、私は「三色弁当」と呼んでいました。友人たちの弁当は、それぞれ工夫されていておかずがたくさん入っていました。私は、教室で弁当を食べるのが嫌になり、体育館の1階にある剣道場で食べていました。ある時ついに、「手抜きをするな！他の子はもっとちゃんとした弁当だぞ！」と怒鳴ると、母は「わかった。」と言いました。翌日、弁当箱を探すと、母が「起きるのが遅いから、もうカバンに入れたよ。」というので、そのまま学校に行きました。学校で弁当箱を取り出すと、やけに軽い…。あわてて開けてみると「ばーか」と書いた紙一枚のみ、弁当がなくても現金でパンか定食を食べれば良いので「なめるなよ。」と財布を見ると、2千円ほどあるはずの現金が空でした。

昼食は、気の毒に思ったらしい友人たちが、クラスメイトから少しずつ集めてくれて、いつもより豪華な弁当を食べましたが、帰宅するとすぐに謝り、それからは三色弁当でがまんしました。しかし、大学生となってから気付いたのです。当時、わが家は富士宮市から富士市に引っ越し、母は職場のすぐ近くの家からはるかに遠い新居に引っ越したばかりだったのです。家族の朝食の支度をして、弁当の準備、洗濯、その後に出勤というのは大変だったろうと思います。私は、そんな簡単なことに気付きもせず「手抜きをするな。」と言ったのです。今はただ赤面するばかりです。

「三色弁当」は、母との笑い話の一つですが、「黒い弁当」の作者同様に、大切な思い出であると共に、相手のことを考えて行動しなければいけないという戒めにもなっています。



----- キリトリセン -----

ご意見・ご感想をお待ちしております。今後の授業計画の参考にさせていただきます。

-----

-----

-----

お子様の名前（ ）